

民族スポーツ実践のための教育システムの構築 －ミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」の教材化を中心に－

石井隆憲*

要旨

本報告は平成22年度国内特別研究「民族スポーツ実践のための教育システムの構築－ミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」の教材化を中心に」に基づく研究成果の一部である。本研究の最終目標はミャンマーの伝統スポーツである「チンロン」の技術指導書を作成することであり、その成果については、平成23年度末に出版予定の『“チンロン”の神髄～ミャンマー伝統の球技～』にて発表する。また、本研究と関連する海外での調査・研究については、科学研究費補助金「体育教育における民族スポーツの教材化と学習プログラムの開発」（研究課題番号22500590）によるものであり、両者の研究は連動している。

本研究を進めていくための方法としては次の3つのアプローチを採用した。第1のアプローチは、ミャンマー国内で出版されたチンロンの指導書を分析すること。第2のアプローチは、私自身がチンロンの参与観察に従事すること。第3のアプローチは、他のスポーツの教授方法を参考にしながらチンロンの指導方法を検討することであった。

その結果、以下のような結論を得た。民族スポーツを学習教材として使用するためには、文化の中核となる部分を翻訳しないことが重要である。なぜなら民族スポーツに関わるすべてを翻訳することは、時として異文化としての文化的支柱を失うことにもなりかねないからである。学習効果の上がる民族スポーツ教材は、学習者が異文化として認識できる部分を翻訳せずに、解説を加えて提示することで、学習者自身に積極的に解釈させるものであることが望ましい。

1. 研究の背景

本研究が対象とする伝統スポーツ、あるいは民族スポーツと呼ばれるスポーツを教材化するという試みについて、その背景に関して簡単に触れておくことにしたい。

中央教育審議会（以下、中教審）は2001年4月に「今後の高等教育改革の推進方策について」の諮問を受けて以降、継続的に審議を重ね、2005年1月に「我が国の高等教育の将来像」として答申を出した¹。この中で「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会』の時代である²ととらえ、それに対応した教育のあり方が示された。その中で「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」という項目において、「特に大学は、全体として①世界的研究・教育拠点、②高度専門職業人養成、③幅広い職業人育成、④総合的教養教育、⑤特定の専門的分野（芸術、体育等）の教育・研究、⑥地域の生涯学習機会の拠点、⑦社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）等の各種の機能を併有するが、各大学ごとの選択により、保有する機能や

* 東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科

比重の置き方は異なる。その比重の置き方が各機関の個性・特色の表れとなり、各大学は緩やかに機能別に分化していくものと考えられる³という見解を打ち出したのである。

このように特色が形成されるような自由度を持たせたことによって、各大学は様々な方向性を打ち出すことにつながっていった。また、教育の質の保証という側面とも連動して、資格やライセンスといった大学とは別の機関が認定する証明書が取得できるようなシステムへと流れていくことにもなった。こうした動きを見据えた上で、さらに文部科学省は中教審に対して2008年9月に「中長期的な大学教育のあり方について」諮問している⁴。その理由として社会構造全体の大きな変革が教育のあり方にも影響を与えることから、社会の動向を踏まえた上で教育のあり方についての提案を求めたわけである。これについては現在、第4次報告まで出されている⁵。ここでも大学における教育の質の保証や大学の機能分化といったことについて議論が進められている。

以上述べてきたような大学教育の流れを受けて、文化人類学やスポーツ人類学などにおいても、2007年頃から大学教育において人類学は、「一体何を教えていくのか」とする議論が活発化し、これまでの授業内容を抜本的に再検討する大きなきっかけとなった。具体的には、日本文化人類学会の学会誌『文化人類学』においては大学と地域との連携で文化人類学的活動の教育実践について特集が組まれ⁶、たま日本体育学会スポーツ人類学専門分科会のシンポジウムなどでは、大学教育におけるスポーツ人類学の授業展開や民族スポーツの教材化などについての議論が進められるようになり、それは今日まで続けられているのである⁷。

このような研究成果を教育現場に還元していこうとするアカデミズムの動きは、この数年、とくに活発化しているようで、教育現場では知識だけではなく、それにともなった資格や免許といったものも同時に取得できるようなカリキュラムに改変されていることも、こうした一連の流れにつながるものであろうと思われる。つまり、単純に新しい知識の伝達という指向性ではなく、実践をともなった知識を獲得させ、また教育の質を保証するという、知識の質の変化を読み取ることができるのである。

こうした時代の流れの中で文化人類学やスポーツ人類学でも、知識の伝達だけではなく、実践的な活動についての取り組みをするような傾向になってきた。例えば、フェアトレードを学内で実践したり⁸、本報告で取り上げるような伝統スポーツや民族スポーツを教材化してそれを授業の中に活用するといった試みがそうした一つである⁹。

以上、述べてきたように、本研究も上記の学問的な流れの中に位置づくものであり、ここで得られた成果を実際の現場で実践していくことを最終的な目的としている。しかし、今回の研究はでは、その前段階までを構築すること。つまり、チンロンを指導するための方法論を確立することが目的である。ただし、他の研究成果との関係から今回の報告はその中の一部に限定されていることは付言しておく。

2. 研究の経過

チンロンを教育現場で利用できるようにするための教授システムを暫定的にでも作り上げていくために、次の3方向からのアプローチを試みた。第1の方向性は、チンロンそのものがこれまで、どのように教えられてきたのかを、ある程度明らかにすることである。もちろん、これまでの歴史の中でチンロンが諸外国で指導されてきたという報告は一度も無い。そこでチンロンについての資料が収集可能なミャンマーにおいてどのようにチンロンが指導されてきたのかについて明らかにすることが必要である。第2の方向性として、チンロンを実際に指導してもらいながら、それらについての記録をとり続ける。つまり、参与観察という方法によりながらデータを集めることを通して、具体的な事例の分析やチンロン選手たちの説明に解釈を加えることを可能とさせる。第3の方向性として、これまで提出されてきた身体教育の教授方法がチンロンを指導するにあたり、どのように利用可能なか。チンロンという教材の特徴を鑑みながら効果的な教授方法を検討する。以上の3方向からの検討の行き着く先の交点が、本研究においての一つの結論となると考えているわけである。

以上の方向性に基づく具体的な1年間の研究活動は、おおよそ次のようなものであった。

- ①年間を通じて、国内の研究者たちと本研究に関わる意見交換をおこなった。
- ②4月～5月中旬まで、すでに入手している先行研究について検討をおこなった。
- ③5月中旬～7月上旬までをミャンマーにおいてチンロンのデータ収集（技術的・文化的）に充てた。
- ④7月から8月下旬まで、データの整理・分析を行った。
- ④9月に再度来緬して、追加しなければならない資料の収集をおこなった。
- ⑤9月下旬～1月中旬までは、引き続き調査データならびに収集資料の分析おこない、教授法とのすりあわせについても可能な範囲で検討をおこなった。
- ⑥2月に補充調査をおこなった。
- ⑦3月には補充調査の成果を組み込んで、最終的な研究成果としてチンロンの教育システムをまとめあげた。

3. 指導書に見る指導の特徴

ここでは研究成果の第1の方向性について、その大枠を報告する。第2、第3の方向性については、今後の出版物の中で具体的に提示されるので、そちらを参照されたい。

さて、これまでチンロンがどのように指導されてきたのかと言う事については、限られた文献においてのみ確認する事が可能であるが、その詳細については十分に検討されてきたわけではない。チンロンの指導について、これまでの歴史の中でその指導方法の在り方に注意が向けられたことはほとんどなかったと言える。史料的に確認できることは、1953年にチンロン連盟が設立され、それと同時にチンロンの競技規則が制定された事である。チンロン競技の制定は、それまで各地方で行われていたローカルな試合方法を統一したと言う表面的な一元化に留まらず、チンロンそのものの在り方を一度再構成したと考えられる。詳細については、別稿に譲として、ここではその概略だけを説明すると次の様に整理できる。技術的な側面でいえば、技術の統一があげられる。このことで動き方の画一化が起こった。次いで、こうした動きを定着させるための講習会や指導が行われた。これに則して動きが実践されるようになった。つまり、技術に対する認識の画一化がおこったわけである。

学習方法という側面で見ると、いわゆる個別指導であったものが、一斉指導へと変化する。ウ・バゾ（文献番号③）によれば技術指導の講習会がアウンサンスタジアムでが開催され、そこに集まった講習者たちは体育館の中で列をつくり、指導者の号令に合わせて技の練習をおこなったことが記されている（pp.11-25）。しかし、こうした記録は、まれで多くの場合、講習会が開催されたことは記録されていても、どのように指導がおこなわれたのかについては、それを記録した資料は残されていない。

そのようなこともあり、ここでは指導内容の変遷の枠組みをチンロンの技術指導書を概観することで示すことにする。

ミャンマー国内で出版されたチンロン関連の著作は、現在確認できるところでは12冊ほどある。そのうちチンロンの技術指導書は、7冊ほどである。それらは次の通りである（訳出したものを以下に示す）¹⁰。

- ①マウンエーマウン 1953『チンロン上達法』ピトゥアリン出版社（ヤンゴン）
- ②ウ・ボジー、チン＝ウ・バティン（北京帰り） 1964『ビルマのチンロン技術100の蹴り方』ウ・フラ（マングレー）
- ③ウ・バゾ 1967『チンロン技術詳述』国民出版（ヤンゴン）
- ④チン＝ウ・バティン（北京帰り） 1969『ビルマのチンロン技術114種類の蹴り方』チンニョ出版（マングレー）
- ⑤ウ・バゾ 1971『チンロン各種技術』ミャンマータンゲン出版社（ヤンゴン）
- ⑥ウ・バティンレー 1971『チンロンの蹴り方の技術』ピンニャーバラサーペタイ
- ⑦ウ・ウィンコ（北京帰り） 2009『ミャンマー伝統スポーツチンロンの知識と練習法』自費出版（ヤンゴン）

まず、チンロン技術書は1950年代前半から出版が開始され、1970年の初頭まで続いてきた。この背景には1953年にミャンマー国内にチンロン連盟が設立され、同時にチンロンの競技規則が作り上げられるようになったこととも関係している。連盟の設立によって、競技ルールが整備された。この競技ルールを普及させるためにチンロン連盟は講習会などを開催し、また指導者を各地に派遣した。こうした活動は、そのいっぽうで指導書の出版も促進したものと考えられる。

しかしながら、その内容を見ると、1953年当初は、競技ルールは固まったものの、まだ指導の方法や動きのスタイルについては、浸透していなかったことを見て取ることができる。1953年に出版された『チンロン上達法』には、現在では見ることができない「ゴンバンドウ」という名称の技法が紹介されている。この技は現在では「マハドゥ」という名称に統一されているが、当時は、地方によって動きも名称も異なる技術がいくつ也存在していたことがわかる。

調査から明らかになったことは、大半の技術と名称はさまざまな地方においても特に違いは見られなかったようであるが、上述したマハドゥをはじめとするいくつかの技術において、地方差が存在していたことが明らかとなった。

次に、こうした指導書に示されている技術指導の変遷についても、現時点でわかる範囲について言及しておきたい。当初、チンロンの技術についての記述は、飛んできたチンロンをどのような格好で、どこの部位で蹴る、という一連の動きを羅列したものであり、もちろん、表現などに若干の違いを見いだすことはできるが、動きの記述方法はおおむね同じであり、ほとんど違いがなかったといえる。ところが、1971年に出版されたウ・バティンレーの『チンロンの蹴り方の技術』は画期的な書物であり、技術の練習のための方法が具体的に記述されたものであった。特に、一つの技の動作を分解して、一つ一つの動きをチンロンの動きと連動させながら詳細に動き方を記述しており、これまでの指導書とは一線を画すものとなった。この書の影響は、その後40年近く後に出版されるウ・ウィンコの著作にも影響を与えており、また、実際にこうした技術書を参考にトレーニングをおこなってきたチンロン選手たちは、この書の画期的な記述の仕方に、非常に触発されたことを語っている¹¹。

また、チンロンは型の練習が重要視されており、動き方を身体に定着させるという方法がすべての書物の中に示されている。これはチンロン特有の美しさを追求するという側面を引き出すための練習方法であり、ただ単にボールを蹴る技術を身につけるといふことにとどまらないということと関係していると説明される。このように型の重要度が増していくのは、競技規則が本格的に統一されてから以降のことのようである。

4. 教材化と実践の間—結語にかえて—

民族スポーツの教材化を目的として本研究は進められてきた。民族スポーツを教材化するにあたって、大きな壁となるのが、文化の翻訳という問題である。民族スポーツに関わるすべてを日本語に翻訳することが、果たして教材化をよりよい方向性へと導くことになるのだろうか。民族スポーツが民族スポーツとして認識される背景には、異文化として認識されるような文化的特長がその中に含まれているからであろう。文化の翻訳は時として文化的境界をボーダレス化する。これによって、異文化理解をより容易にする可能性もあるが、そのいっぽうで異文化と認識されてきた行為を形作ってきた、ある意味、文化的支柱がそぎ落とされる場合もある。

このように考えると民族スポーツの教材化は、民族スポーツと認識されている核を壊さないようにしながら、それをパッケージ化して異文化に持ち込めるような加工をし、その異文化の理解を助けるような文化的翻訳・説明を加えることではないかと思われる。つまり、異文化としての特徴を壊さないようにしながら、その異文化と認識される事項について、それが異なる因果律の中で実は合理性を持っている行為であることの説明をし、理解させることが、民族スポーツを教材化する最も重要な点ではないかと思われる。この点を生かしていくことによって、教材化された民族スポーツを実践させる、あるいは実践する現場において、異

文化理解という立場から民族スポーツをよりよく理解していくことが可能になると考えられる。ただし、この点については、民族スポーツが教材化されてからの実践研究となるので、今後の課題でもある。

注釈

- 1 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm
- 2 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101/002.htm
- 3 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101/003.htm
- 4 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/08091607.htm
- 5 文部科学省ホームページ：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1295686.htm
- 6 「〈特集〉大学-地域連携時代の文化人類学」、『文化人類学』72巻2号,2007.
- 7 2011年度においても「日本の伝統スポーツ教育を問う」と題したシンポジウムがおこなわれ、いわゆる伝統文化を背景とした教育方法などの問題が議論された。
- 8 東洋大学国際地域学部において試みられた取り組みである。
- 9 民族スポーツの教材化については、これまでの日本体育学会スポーツ人類学専門分科会の一般発表の中で非常に多くの研究成果が公表されており、関心の高さを窺わせている。
- 10 本来なら、原文あるいはローマナイズされたものを示さなければならないが、原文で表示する場合、表示フォントがUnicode化されていないことと、ローマナイズについても国際統一された方法が存在しないこと、さらに今回の目的は報告であるので、その大要が理解できればよいことなどから、翻訳した日本語のみの提示とする。
- 11 たとえば、ワーズチンロン祭というミャンマーで最大のチンロン大会が、ビルマ暦のワーズ月におこなわれるが、ここに出場する年配の選手たちの多くは、この本の恩恵を受けたことを語っている。もちろん、直接先生について学ぶこともおこなってきたが、それらの多くは見せるだけで、言葉での説明は少なかったという。そのため、こうした技術書を参考にしながら、練習をしたというのである。

Toward making an educational system of ethnic sport practice
- with special reference to the Myanmarese traditional sport "Chinlone" as a
teaching material in class -

ISHII TAKANORI

In this report a teaching method using Myanmar's traditional sport "Chinlone" as a teaching material will be examined.

This method is supported by research described in my book "The Essence of the Chinlone in Myanmar".

The following three approaches were used in the research. The 1st was to make an analysis of the books on Chinlone published in Myanmar. In the 2nd approach, participant observation of Chinlone was made, taking an inside view of the sport. As the 3rd approach, the teaching method of Chinlone was examined and these approaches led to the following conclusion.

In order to use an ethnic sport as a teaching material, it is important not to translate the core part of its culture. This is the same conclusion as to the case of Chinlone.